

とかす力 (八木重吉の詩を愛好する会会報)

事務局（連絡先）〒277-0014 千葉県柏市東 3-8-34 柏第一宣教バプテスト教会
*****天利武人（教会牧師）電話 04-7164-9159
（会報編集、ホームページの連絡先）〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継
***** Eメール kmat27aiko@gmail.com 携帯電話 09061674553

☆ 第 27 号
☆2023 年（令和 5 年）
6 月 27 日 発行

★ 2023 年の茶の花忌の概要決まる

コロナ禍の活動制限が撤廃され、自由になりつつある年になりました。今年の花忌（八木重吉の命日）に行う概要がほぼ確定しましたので、皆様にお知らせしておきます。

時：2023 年 10 月 26 日（木）

場所：八木重吉生家（八木重吉記念館）

日程：

1 2 時 3 0 分～1 3 時 墓前礼拝（昨年と同じ牧野信次牧師の司式で行います。）

中庭へ移動

1 3 時～1 5 時 八木重吉を偲ぶ会（敬称略）

司会 青木幸雄

- ・茶の花忌準備委員長挨拶 八木幹夫
- ・茶の花忌に寄せて
杉浦信男、苅部幹央、神林由貴子
- ・詩の朗読 地元の朗読サークル「ちえの環」
- ・ギター弾き語り 歌手 YO-EN（ヨーエン）
- ・重吉詩の身体表現 武蔵野美術大学学生
——休憩・交流——
- ・記念館館長挨拶 八木明男
- ・茶の花忌の歴史情報他 小林正継



今年も昨年同様の好天気になって欲しいと思います。参列者と一緒に、みどりの木々に囲まれた重吉生家の澄んだ空気を味わいたいと思います。

★昨年 8 月に日本基督教団出版局から出た『八木重吉家族を詩う』の書評

昨年 10 月の茶の花忌での出会いをきっかけに、『八木重吉家族を詩う』（日本基督教団出版局）の書評を小林が依頼され、ちょうど良い本だなあと感じていたところでしたので、書かさせていただきました。重吉の理解にも役立つと思いますので、この会報にも載せておきます。

意外に無かった家族をテーマにした八木重吉の選詩集

小林正継

八木重吉は文学の世界で派手に取り扱われる詩人ではない。しかし、ほぼ毎年詩の選集や鑑賞文集、研究論文等が出版される。重吉の詩の魅力を伝えたいからである。そして新しい重吉関係の本が出れば必ず購入する心酔者もいる。八木重吉とその詩の愛好者は、地味ながら根強く存在している。最近では画やイラスト、写真等を入れて読み易くした選詩集がよく出版される。再評価の波がまた来ている。

本書『八木重吉 家族を詩う』もその 1 冊で、余白効果も考え写真を巧みに配置し、表紙の装丁も美しく、ページ数も手頃である。また詩の前に入れた簡潔な解説で、八木重吉及び没後に残された家族の様子も概観できる。一番の特徴は、「家族」という明確な中心テーマで詩を選び、生涯の時間の流れを考えつつ、移り目ごとにサブテーマも立てて、要点を解説してから詩に導いていることである。

数え年 30 歳で没し、詩作期間わずか 5 年ほどの八木重吉だが、深い人生求道の生涯のゆえに、詩も生き方も読者に訴えかけて来るテーマは多い。そして家族以外の交友が少なかったため、表紙の有名な家族写真さながら、

重吉にとって家族は大切な存在であり、読者も重吉の家族愛を感じ取る。しかし一般的に読者はまず、心の琴線に触れて来る詩に共鳴し、重吉の純粹さに魅了されるので、関心の的は詩であり重吉である。そのため、家族をうたった詩に感動しても、愛する重吉の一部の姿でしかなかった。

日本キリスト教団出版局は、かつて『単純な祈り』（関茂著、1989年）で、八木重吉の詩の魅力を十分伝えてくれたが、他のキリスト教系出版社が、最近八木重吉をよく取り上げているのに比べると、久し振りの出版と思われる。読み易さを考えた最近の構成方法を進化させつつ、家族を前面に掲げた独自性で、読者の関心を引きそうだ。

私も八木重吉愛好者の一人で、18歳の時に詩を読んで大好きになり、最初は〈私の重吉〉という思いで、一人静かに鑑賞し始めた。しかしすぐ、私の母校東葛飾高校（千葉県柏市にある県立高校で旧制中学）の創立2年目の大正14年、八木重吉が英語教師として赴任し、翌年肺結核になって学校を去るまでの1年余り教えていた事を知って、親しみが倍加した。15年後、八木重吉が教えていた旧校舎の保存運動を契機に、重吉の愛好者4人が発起人となって、その後37年も続く「八木重吉の詩を愛好する会」を結成した。詩碑の建立運動や柏ゆかりの場所とそこでの生活の調査、講演会の企画、全国のゆかりの地への訪問とそこに残る資料や教え子の証言記録の収集など、あらゆる活動を展開した。八木重吉の妻で後に歌人の吉野秀雄と再婚した登美子夫人ともお会いできた。また八木重吉生家への訪問、記念館見学、命日の行事「茶の花忌」への参加等、全国を廻りながら多くの事を学ぶことができた。

その視点から見ると、この本の柏時代の解説が少し物足りない。わずか1年余りでも八木重吉の柏時代は、詩人・教師・父親として最も充実した時期だった。多くの愛好者が共通して好きな詩は、柏時代に作詩されたものが多いのである。しかし、子として、夫として、父としての重吉の思いを中心に据えて詩を選び解説を加え、家族を浮かび上がらせた編集は新鮮で、愛される1冊になると思う。

* ここにもいた八木重吉の愛好者

八木重吉を愛好している人々の特徴の一つに、隠れた愛好者が多い事があります。最近またそんな隠れ八木重吉愛好者を発見しました。群馬県藤岡市で教師、書家として活躍し2年前（2021年8月）に亡くなった高野俊峰〈たかのしゅんぼう〉（本名高野俊）さんです。数多く残された書の個展を開いたらどうかという周囲の人々の言葉に促されて、奥様と娘さんが周囲の協力を得て、今年の3月に市内のカフェ「海遊亭」で個展を開きました。個展の開催を促した一人が私の友人であり、彼が高野さんの個展を一度見に行き、そこに八木重吉の詩も書かれていたのを見て、すぐ私に連絡があり、個展の開催期間中に行き見ないかと誘われ、彼と一緒に藤岡のカフェを訪問することになったのです。

○原へねころがり 何にもない空を見ていたい（『貧しき信徒』春）

○炭火をおこすのはおもしろい／なにも忘れて夢中になれる（詩稿「赤い寝衣」）



八木重吉の詩を書き書いた高野さんは、私の友人と同じ早稲田の教育学部国語国文学科を卒業し、国語と書道の高校教師となり、教師と並行して書家としての活動をして来た人でした。昭和から平成に移るころから本格的に作品を書き始め、属している書の団体「青潮会」で大賞を受賞したり、各種の大会に出品、日本最大の書の公募展覧会である読売書法展にも出品し多数回入選しました。このような活動は、書家には一般的ですが、私が遺

作展で高野さんが書いた八木重吉の書を直接見て、その他の作品も見て感じる特徴がありました。書家として書道史の有名な人物の書や有名な漢詩を題材に選ぶのは自然ですが、高野さんが題材に選ぶ言葉に共通するものが見えたのです。八木重吉の詩を選んだのと同じ選定をしているのです。心に訴える言葉を書いています。そして彼が各種の出展のために作成した額縁には、彼の多彩な芸術能力がにじみ出ていました。絵心もあり、八木重吉の2作品にも小さなカットが入っていました。詩の心を理解した絵です。奥様（高野しのぶさん）にご主人がどんな方だったかと尋ねた時、重吉と同じ純粋な人だったという事に加え、読書家、音楽好き、ギターもピアノも演奏出来た人だったとのこと。それらの趣味が書作品にも表装にも現れています。その特徴が、見て直観できるのです。奥様の説明したことが、展覧会のパンフにも書かれていましたが、それを見ない前に、作品から推察できました。「69歳で亡くなったけれど、夢がかなった人だったと思います」と奥様が言われました。今の時代からすればまだ若い年ですが、やることをやって天寿を全うした人生だったのだと思いました。宮沢賢治も好きだったという事も聞き、高野さんは、重吉と同じく純粋な心を一生持ち続けた人だったのだと思いました。

★八木重吉の求道の世界を広げた英語への目覚め

クリスチャン詩人と言われる八木重吉の求道が、キリスト教との出会いが大きな要素だったことは、だれも異論がない所ですが、そのキリスト教との出会いを導いた要素として、英語との出会いがあります。鎌倉師範時代の高学年の時、近くにあった教会のバイブルクラスに出ていたという情報はほぼ定着しています。バイブルクラスに出て聖書を勉強したいというわけではなく、英語を勉強したかったというのが本音でしょう。師範学校入学時からクラス一の勉強熱心で、辞書がぼろぼろになっていたと同級生が証言しています。（「鎌倉師範の頃」宮治武『草』八木重吉追憶号 昭和3年）2019年12月に発見された1915年の英文日記（鎌倉師範2年生から3年生）の存在が示すように、英語力向上のために毎日英語で日記を書き続けるほど英語力の向上に努めていたのです。書き始めのトツトツさは感じられても、現代の高校生と比べたら彼の英語力のレベルの高さを感じます。

鎌倉師範に入学早々の予科の時に、もう誰にも負けない英語力を発揮していたとしたら、その下地はおそらく川尻小学校高等科の時代に興味が芽生えていたと思われます。川尻小学校の歴史を紐解くと、以下の記述がありました。

明治25年5月5日 高等小学科を設け、尋常高等川尻小学校と称し英語を課す。

とあります。学校制度が目まぐるしく変わる時代でしたから、重吉の高等科の時代（明治43年～44年）に教えられていたか（随意科目の事が多いので教えられないこともあったから）は不明ですが、重吉が尋常小学校6年生の時に準訓導として勤務していた従兄弟の小林権一郎が、鎌倉師範入学のために退職する頃でした。権一郎は『英文日記』の中で重吉が英語を志すのを促がした存在として出て来ています。その当時権一郎は東京高等師範の学生になっており、おそらく彼の促しで夏休みに、神田の英語学校に行く決心をしたと思われます。従兄弟という近い関係の友人が英語の重要さを重吉に教えていたので、彼は一層英語への興味を深めて行ったようです。『英文日記』7月5日の記録には、

先生はなぜ僕が最近英語をそんなに熱心に勉強するのかと言った。僕は小林（小林権一郎）さんが英語を習得するよう助言してくれたからと答えた。

とあります。教会への出席と英語世界への没入が、高等師範での英語及び英文学の学習、背景にあるキリスト教学習へ導き、信仰による求道へと導いて行ったようです。東京高等師範学校での本格的な英語の学習で、彼の英語力は一層磨かれ、ジョン・キーツの詩集を英語で読むために丸善を通してイギリスへ注文するほどになっていました。英文を読める力を持っていたので、英文学作品を読みこなし、キリスト関係の書物も読み、西欧の文化を理解した上での万葉集や芭蕉を愛する重吉の日本的感性が重吉の詩を生み出したのだと思います。重吉の詩は一般的な日本人の感性で素直に読める詩なので、西欧文学やキリスト教が彼の詩の背景にあることを考えなくても鑑賞は出来ませんが、英語力を土台とした重吉の西欧文学の素養を理解することは、彼の詩を深く理解するに役立つと思います。登美子夫人が選んだ生家の庭の詩碑「素朴な琴」は、重吉愛好者が誰でも好きになる詩ですが、あの4行の詩のもつ魅力はまだまだ解明されていく可能性があります。そのポイントの一つが重吉の英文学の素養でしょう。その意味で彼が早くから英語学習に目覚めた事は、大きな意味を持っていると思います。

★八木重吉ゆかりの地の一つ 柏の東葛飾高校（重吉時代の東葛飾中学校）創立100周年

わずか1年余りの滞在でしたが、最も求道の心が高まり、多くの人に共通して愛される詩を多く生み出した重吉の柏時代、大正14年に英語教師として赴任した東葛飾中学校（戦後は高校）は創立2年目でした。モダンな

鉄筋コンクリートの新校舎が現在の地に建てられ、その新校舎に初めて入って重吉は教えたのです。重吉との関係は戦後の昭和40年までは、文学書等で話題にされませんでした。東葛飾高校創立40周年誌に、かつて八木重吉が教えていたという文章が、館野晃（後作家としては伊藤晃）氏によって紹介されました。50周年誌にも再掲されました。この館野氏の掲載をもとに、『房総の文学めぐり』など、千葉県郷土文学の紹介書に載り始めました。やがてあのモダンだった校舎も60年近くの歳月がたって老朽化し、昭和58年、この校舎を4年後に取り壊して新築する話が出てきました。その時歴史ある校舎を保存する運動が起き始めました。柏の「おもしろ倶楽部」というタウン誌は、重吉が教えた由緒ある校舎であることを訴え、昭和60年1月号では、川尻小学校にある詩碑「飯」の写真を掲載して、「八木重吉の詩碑を柏に！」と訴えました。

この取り上げを機に、この年の2月、私を含め4人の愛好者が一同に会し「八木重吉の詩を愛好する会」が結成されました。最初の主な活動は八木重吉の柏滞在中の足跡調査と詩碑建立であり、賛同して集まった愛好会員の努力でその年の内に実現させました。10月26日に詩碑「原っぱ」が建立され11月4日に除幕式と建立記念誌の配布がありました。これらの活動のために、まだ生存していた重吉の教え子たちや東葛同窓会の多大な協力がありました。この活動の影響もあってか校舎の取り壊しはしばらく延長され部活動の部屋として活用されました。昭和63年、老朽化した校舎の隣にセミナーハウスと同窓会館が一つになった建物が出来た時、「秋瞳館」という名前が付けられました。またいよいよ校舎の解体が決まった時、玄関部分を保存しモニュメントの一部として活用することになり、平成7年そのモニュメントが美しく完成しました。

また、詩碑「原っぱ」建立後、柏市関係の本や雑誌に取り上げられるようになり、詩碑の存在と重吉の詩の魅力が知られて、平成27(2015年)10月には、東葛飾高校90周年の同窓会の記念行事として朗読劇「いっぽんのみち」が麗澤朗読劇グループによって上演されました。私は幸運にもこれを見る機会に恵まれました

そして今年2014年に高校は創立100周年を迎え、その記念式典に向けて準備中ですが、愛好会員である私は、折しも現在、同窓会白井支部の支部長であり、100周年の記念行事や記念誌発行の準備に関係しています。私が八木重吉の愛好者であることが少しずつ伝わり、記念誌の一部に八木重吉の記事を載せてもらえそうです。また不思議なことに、同窓会館でもあるセミナーハウス「秋瞳館」の改修が、記念活動の1つになることが決まりました。この事も、記念すべき100周年に八木重吉と高校のつながりが再確認される機会になります。私は、記念行事関係終了までにさらに可能な限り八木重吉と高校のつながりを伝えていこうと思っています。

* (上記に関連して協力をお願い)

100周年記念に伴い、一般的な事ですが、寄付金募集活動があります。私は卒業生として既に協力していますが、八木重吉の名を留めるために、「八木重吉の詩を愛好する会」としても協力しようと思っています。私の考えに賛同して協力して下さる方がいれば、一緒にしませんか。愛好会としてまとめて寄付するので個人に礼状が届いたりはしませんが、ご了解ください。賛同いただける方は下記へお願いします。金額は自由です。

千葉興業銀行 白井(しろい)支店 普通 4294731 コバヤシ マサツグ

★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

(募集) 題:「八木重吉との出会いとその詩の魅力」(この内容に沿うなら別のタイトルでもOKです。)

字数:2000字程度(原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎)

締切:なし(随時お送りください)

送り先:メール(kmat27aiko@gmail.com)か

郵送で 〒270-1406 千葉県 白井市 中205 小林正継 へ

★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス <http://www.yagijuaiko.com/> (更新が遅れていて申し訳ありません。)

Eメールアドレス kmat27aiko@gmail.com (管理者小林正継)

*茶の花忌について早く知らせるべく5月には発行したかったのですが、少し体調を崩したこともあり遅れてしまいました。銃関係の事件が続いています。たまたま居合わせた人が命を奪われています。情緒豊かなはずの日本が、人間をモノや機械のように見る恐ろしい社会になってきています。『秋の瞳』の中に「人を殺さば」という詩があります。重吉は心の奥底に潜む罪の姿をあえて詩に表現しましたが、決して実行してはならない事だという良心を持つ人間でした。しかし最近の犯罪者は罪の意識も反省の心も無く殺人を犯します。「人を殺して見たかった」「たまたまそこにいたから」という理由だけで。良心を失った人間の心を重吉は予言したのでしょうか？